

University of Cambridge での研究生活

松瀬 大

2014年10月より、九州大学神経内科から英国ケンブリッジ大学のStem Cell Instituteに留学しております。現在研究生活を行っているケンブリッジと、研究内容に関して、ごく簡単ではございますが、ご紹介させていただきます。

ケンブリッジはロンドンの北約80km、電車で1時間程度の場所に位置しています。ここケンブリッジを含むロンドンの北東部は、7世紀に成立した七王国の一つイーストアングリア王国にちなみ、その名のとおりイーストアングリアと呼ばれ、17世紀頃の古い街並みを現在に残しています。ケンブリッジ市は、ケンブリッジシャー州都となっていますが、州都といってもこぢんまりとした街で、中心部から車で10分も行くと、日本でいえば北海道の大地を思わせるような草原や牧場が広がっています。人口は12万人程度の規模ですが、大学の街という側面が強く、学生が人口の2割程度を占めています。また住民も多国籍で、息子たちの通う小学校に在籍する児童の国籍数は、合計すると30近くになるそうです。その分人々は皆、他国から来る人間に対して寛容で、私たち外国人にとってはとても暮らしやすく感じます。イギリス全体に言えることかもしれませんが、基本的に山が少なく、また高い建物も比較的少ないため、空が非常に広々とした印象です。街中に緑があふれ、道端でリスなどの小動物を見ることもしばしばです。公園はどこも大人が思いきりサッカーボールを蹴っても全く問題ない広さがあります。気候は現在冬(2月)で、気温は留学前まで住んで

いた福岡より少し低めですが、緯度の割にはさほど寒さを感じず、外ではすでに桜が咲いています。夏は半袖が不要なくらいの快適な温度で、日本に比べると格段に過ごしやすい気候です。真夏は日が非常に長いというのも、日本人からすると不思議な感覚で、子供を連れてラボのメンバーたちと屋外でバーベキューを楽しんでいたら、まだしっかり明るいのにいつの間にか午後9時を回っていたということもありました。

ケンブリッジ大学の創設は、西暦1209年に遡ります。日本では鎌倉幕府ができて間もない頃でしょうか。それより以前に創設されていたオックスフォード大学が、町との対立が激しくなり、逃れてきた学者たちによって創設されたそうです。非常に長い歴史を持つ大学ですが、過去にはアイザック・ニュートンやチャールズ・ダーウィンなど、特に自然科学分野での突出した人材が目立ち、現時点でのノーベル賞受賞者の数では90名を誇ります。大学は、31のカレッジから成るカレッジ制を採っており、各カレッジはケンブリッジ大学の一部でありながら高い独立性を保っています。学生は現在31個あるカレッジのどこかに所属する必要があり、入学時も学部からの合格とは別にカレッジからの合格も受け取る必要があります。ここでいうカレッジとは、単科大学という意味ではなく、日本語では学寮と訳され、学生にとって、寝食を含めた生活の場ともなっています。それぞれのカレッジに法律を学んだり、工学を学んだりする学生がいたりして、学部の縦のつながりに対して、横のつながりを持たせる集まりといえれば分かりやすいかと思います。私のようなポスドクの訪問研究者は、特にカレッジ所属の義務はなく、特定のカレッジと深くかかわることはあまりな

Matsuse, Dai

Stem Cell Institute, University of Cambridge

E-mail : matsuse@neuro.med.kyushu-u.ac.jp